

## 「友だち」の意味と成り立ち

—教育基本語彙の一研究—\*

齊藤由衣子\*\*・山内洋一郎\*\*\*

(奈良教育大学大学院・国語学研究室)

**要旨：**教育基本語彙の一つである「友だち」は、「友」と複数を示す接尾語「たち」によってできている。それが、現代では「A君は僕の友だちだ」といった単数を表す用法が用いられる。本来複数を表していた「友だち」は、汎称としての「友」の領域を侵し、単数を表すようになり、複数としての意味が薄れていく。「友だち」は以上のような語史をたどり現代に至る。

**キーワード：**友だち、教育基本語彙、接尾語「たち」

### 1

ここに研究対象とする語「友だち」は、現代日本語の中で使用頻度が高く、意義上も欠くことができない重要な語である。教育においては、一層その重要度を増す。教育基本語彙それぞれの本質、現代までの変遷を知ることは、国語教育の内容を豊かにするであろう。その一つとして「友だち」を考察したい。

阪本一郎『新教育基本語彙』<sup>1)</sup>では下のように記される。「友」も併せて示す。

ともだち 友達 ②④ 名 AI ○は常用漢字表にある語。

とも 友 ② 名 AI ○の中の数字は学年別漢字配当表の学年。

「ともだち」は小学校低学年の教育基本語彙のAI2570語の中に入り、「とも」は同高学年、BI2364語の中に入っている。学年別漢字配当表で「友」は2学年、「達」は6学年に配当されている。一般社会ではどうかと見ると、『常用漢字表』に下のように載る。

友 ユウ 友好, 友情, 親友 (備考欄) 友達 (ともだち) \*達タツ備考欄にも。  
とも 友

このように「友達」は社会的に承認されており、今さら問題とするところはないようであるが、看過できないところがある。まずは意味である。「友だち」の「たち」は複数を示す接尾語であったはずであり、「A君は僕の友だちだ」と単数を指す用法は後の転成であろうが、その事情は如

---

\*The meaning and formation of "Tomodachi"—A study of Educational foundation vocabulary—

\*\*Yuiko Saitoh (Graduate student, Master's Degree Program of Japanese linguistics, Nara University of Education)

\*\*\*Youichiro Yamauchi (Department of Japanese linguistics, Nara University of Education)

何であろうか。また、「達」には漢音タツ、吳音ダチとされ、その吳音を用いたとすれば、和語＋漢字（吳音）という極めて異例の構成となる。接尾語「だち」は清音「たち」が今も基本であるから、この漢字表記に固定した過程はさらに追求すべきことになる。「たち」は和語であると認識されているから、「達」に表記が固定したのをどう理解すべきであろうか。ここで「こども」が「子供」となるのに事情が酷似しているのに気づくのである。

山内は「〈子ども〉の語史」<sup>9)</sup>において、「子ども」という語についての語史をたどり、「〈子ども〉は古代語では複数を示し、後に汎称及び単数として用いられる。親という属性に対応する‘子’を意味する呼称として〈おや（祖・親）〉の対概念として存在した〈こ〉は、それ自体は変化しがたいが、複数形〈こども〉において、複数故の共通性、一般性を帯びて、若年齢の人々一般を指すようになってゆく。そして、やがて〈こ〉の領域を侵してゆくことになるのであろう。」という趣旨を論じた。また、「人を表すばあい、人は全て個から成り立つが、同性質の人の集合を把握して表現するのに、日本語では複数形を用いない。複数形は特別に複数を表現する必要がある時に用いるのである。しかし、集合体が複数である以上、汎称としての単数形と、複数形との間に交渉が起こるのは当然である。「友だち」「君だち」も複数形から汎称形は、そして「A君は僕の友だちだ」という用法を生じる。語の交替の欲求があれば、複数形が他の領域に進出するという方向をとるのは当然である。」とし、ここで「友だち」にも「子ども」と同質の変遷の過程を見ている。「友だち」は「とも」に複数を表す接尾辞「たち」がついてできており、古代では「子ども」と同様に複数を示し、現代語の「友だち」とでは、性質が異なる。

「友だち」について「子ども」の語史を参考にしながら、語史をたどり、そこに見られる種々の問題について考察を試みることにする。

## 2

「友だち」は坂詰力治氏が指摘するように、『日本書紀』に一例見られる<sup>3)</sup>。

鹿父の曰く、「諾<sup>せ</sup>」といふ。即ち言ふ所を知れり。同伴者（ともだち）有りて、其の意を悟らずして  
(仁賢天皇六年九月)

トモタチの訓は新訂増補国史大系に古写本の指示なく載っており、どこまで遡れるか未詳である。だが、上代には不確実なこの例のみである。『萬葉集』では、「友」は九例あるが「友だち」は一例も見られない。

中古にはいと、森昇一氏の指摘にもあるように『伊勢物語』に「友だちども」が二例見られる<sup>4)</sup>。

むかし、おとこ、あづまへ行きけるに、友だちどもに、みちよりいひをこせける。

(伊勢物語・十一段)

昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちどもあつまりて、月を見て、それがなかに一人…  
(伊勢物語・八十八段)

以上の二例であるが、「友だち」は、一語となっていたと見られる。確認のため「友だち」の例を見てみると、いずれも複数ではない。

思ひわびて、ねむごろに相語らひける友だちのもとに、「かうかう今はとてまかるを、何事もいさゝかなることもえせで、遣はすこと」と書いて、おくに、  
手を折りてあひ見し事をかぞふればとおといひつゝ、四つは経にけり  
かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜の物までをくりてよめる。  
(伊勢物語・十六段)

むかし、おとこ、津の國にしる所ありけるに、あにおとゝ友だちひきゐて、難波の方にいきけり。  
(伊勢物語・六十六段)

むかし、おとこ、友だちの人をうしなへるがもとにやりける。  
(伊勢物語・百九段)

これら「友だち」は「友」と入れかえることができるであろう。

『平中物語』には「ともだちめく」という複合語が現れる。

……案内を知らで、しきりつゝ、二三日やりけれど、ついに取り入れずなりにければ、かの志賀に率て参りける友だちめきたるが、ものの故知りたるを、この男、呼びにやりて、ことのあるやう、ありし事などもろともに見る人なれば……  
(平中物語・二十五段)

「友だち」は間違いなく一語扱いであり、その上「友」の持つ汎称としての性格も有すると考えられる。「友だちども」といった形も五例見られる。

……網引かせなどしけるに、知れる人、「せうえんせむ」とて、呼びければ、そちぞ、この男は去にける。そのほどに、この女は歸り来て、うちに参りて、友だちどもに、志賀に詣でて、ありつるやうなど言ひける。  
(平中物語・二十五段)

又、この同じ男、友だちども、あまたものして、日の暮れにければ、「わづらはし」とて、男、やみにけり。また、この同じ男、友だちども、あまたものして、日の暮れにければ、歸り来るに、道のほどに、ある人の言ひける。  
(平中物語・十四段)

さて、また、こと友だちどもぞ、來たりける。  
(平中物語・一段)

この男の友だちども集まり来て、言ひ慰めなどしければ、酒ら飲ませけるに、宵になりければ、いさゝかけ近き遊びなどして……  
(平中物語・一段)

【大和物語】にも三例「友だちども」が見られる。

その程にこの女内裏へぞまいりけるに、さて友達どもに、志賀にてをかしかりつる事などぞいひける。  
(付載説話)

かゝる事どもを聞きあはれがりて、此友だちども、あつまりきて慰めければ、酒飲ませなどして、いさゝか遊びのけぢかきをぞしける。  
(付載説話)

さて又の夜の月おかしかりければ、簀子にゐて、大空をながめてゐたりける程に、夜のふけゆけば、風いと涼しうち吹きつゝ、苦しきまでおほえければ、物のゆへしる友達のもとに、「これのみぞかねて月みるらん」とて、かゝる歌をよみて遣しける、  
なげきつゝ空なる月とながむれば涙ぞあまの川とながるゝ  
さりけるほどにいと深からぬ事成ければ、元の官になりけり。此友だちどもは躬恆・友則がほどなりけり。  
(付載説話)

三つ目の用例で、先にてでくる「物のゆへしける友達」と、「友だちども」は同じ人物たちを指すと思われる。躬恆、友則の二人である。ではなぜ「物のゆへしける友達」は、「物のゆへしける友達ども」ではないのであろうか。

先の「友だち」は、汎称であり、この場面で個々を指し示すための表現ではない。後の「友だち」は「ども」をつけることにより、複数であることを表す必要があったのではないか。躬恆と友則の二人を表すためには「友だち」ではなく、「友だちども」にしなければならなかった。【大和物語】における「友だち」は、「友」＋「たち」といった概念は持たず、分析的に複数を表すものではない。これは【大和物語】に始まったことではなく、【伊勢物語】においても同様と思われる。

……一文字をだにひかぬ様になりければ、かく思はずと友だちども思はる、などこそ見えて侍れ。  
(無名草子 紫式部)

室町時代の抄物の例も加えておく。

阮籍一是モ七賢ノ中ソ。戒カ父ト昔カラ友タチソ。  
(蒙求抄一)

これは、複数の意味を持たない汎称、単数である。

『今昔物語集』にみられる「ともだち」三例は、いずれも「とも」の表記が異なる。

汝、昔ハ、思フニ竹馬ノ時ノ友達也 (巻一・二十五話)

而ニ我が君ノ御徳ニカク俱達ト成テ…… (巻五・二十話)

昔ノ共達ニテ有ケル者ノ清水ノ邊ニ有ケルガ許ニ…… (巻三十一・三十話)

「たち」は共通して「達」の字が宛てられる。上代では「等」の字を「たち」「ども」「ら」と適宜訓まれている。『大和物語』等の「達」の表記は写本により異なる。

古の七の賢しき人<sup>たち</sup>等も欲りせしものは酒にしあるらし (萬葉集 三四〇)

「子ども」の漢字表記は、子等→子共→子供、という変遷をたどっている<sup>5)</sup>。これについて山内は、「(達)の字音と、〈先達〉〈上達部〉という語の影響により〈達〉を宛て始めたのであろうが、〈君達、公達〉は別として、接尾語〈たち〉全般にこれを使用するには至っていない。』<sup>6)</sup>と述べた。

「達」の字は『日本書紀』の古訓では「トホル」「カヨフ」など、動詞の訓がある。なぜ「友だち」に「達」の字を宛てたのであろうか。

『漢語大詞典』によって、「達」の字に複数の意味があることが分かる。

「副詞。皆、都」(「都」は全ての意である。)

君子達壺壺焉 (禮記・禮器) ([鄭玄注]達、猶皆也。)

『佩文韻府』『簡明漢語逆序詞典』には、「達」を下に持つ熟語の中に複数の意味を持つものは見られない。「友達」「君達」も見られない。

「友達」という表記は、中世・近世に『弘治二年本 節用集』『運歩色葉集』『恵空編 節用集 大全』に見られる。

『倭名類聚抄』では「朋友」についての訓注に「止毛太知」と書かれる。

坂詰力治氏は、「友だち」は複数の意味の時は「トモータチ」で単数の意味の時は「トモダチ」である<sup>7)</sup>という。

『類聚名義抄』では「友」の訓みとして「トモダチ」(上上上濁上)が宛てられる。

「たち」とよく似た性質を持つ語に「どち」がある。『邦訳日葡辞書』には「友だち」と並んで「友どち」という語がとりあげられている<sup>8)</sup>。

Tomodachi. トモダチ (友達) 仲間、または、友人。

Tomodochi. トモドチ (友どち) 詩歌語。Tomodachi (友達) に同じ。同上。

「友どち」以外にも「どち」は二語ある。

Vomôdochi. ラモドチ (思ふどち) 互いに親しみ合う者同士。詩歌語。

Vtocaranu dochi. ウトカラヌドチ (疎からぬどち) 親しい友だち、仲間。

ともとち おもふとち 思ふとしの友也

(藻塩草・卷十五)

「思ふどち」「ともとち」は『日葡辞書』で詩歌語と注があり、連歌辞書等に載るところを見ると、歌語乃至文章語の語感を持っていた。

「どち」は「だち」から変化したもの、という説がある。佐藤喜代治氏は「和語にはもともと濁音で始まる語がなかったと考えられるから、「どち」も本来の語形ではなく、「たち」と同源の語ではないかと考えられる。「友だち」を古く「友どち」ともいうが、「たち」が接尾語のように用いられて、連濁により「だち」となり、それが「どち」に転じたのではないかと考えられる。』<sup>9)</sup>と言われる。

「どち」という語は上代の『萬葉集』に十五例見られる。『時代別国語大辞典上代編』では「どち」について「同士。常に体言または用言の連体形に下接して形式名詞的な存在となっている。ドチがついた全体はその下に格助詞の類の接した例を見ず、副詞に近い性格を持つ。」とされる。

貴人は貴人<sup>どち</sup>奴知や親友はも親友奴知いざ鬨はなわれは

(神功紀元年)

梅の花今盛りなり思ふ<sup>どち</sup>度知かざしにしてな今盛りなり

(萬葉集 八二〇)

鶉鳴く古りにし郷の秋萩を思ふ人<sup>どち</sup>共相見つかるかも

(萬葉集 一五五八)

「友どち」の「どち」は、上記の意味の説明に当てはまるであろうか。「どち」自体には、すでに仲間という意味があり、意味の上から見ると「友どち」の「友」と「どち」は同類の意味が重なることになる。

「たち」は現在でも用いられるがその場合、濁音にはならない。(例「生徒たち」「友だち」の場合だけである。「ども」は「とも」ではなく、濁る。(例「わたくしども」)

「どち」が「だち」から変化したものであるのならば、「友だち」以外に「たち」が濁音化するものは何か。「達」の漢字を用い「だち」と濁る単語には「かんだちめ 上達部」「きんだち 君達・公達」がある。(漢語の「先達」も無視できない。)

この場合の「たち」は「友だち」の「だち」と同類の性質を持つであろうか。接尾語的である

のであろうか。

「きむだち」は「kimitati → kimtati → kimdati → kindati」という変遷を遂げたとされる。「上達部」は「カン」は「カミ（上）」の音便形。「タチ」は複数語尾。「メ」は群の意と『岩波古語辞典』では説明する。

現在「たち」が「だち」とならないのは「たち」は接尾辞的な要素以外に持ち合わせていないからである。接尾語であり、接続している前の語とは一語ではないからである。「わたくしども」の「ども」の場合は、現在「とも」ではなく、接続する前から「ども」と濁っているのである。

「友だち」以外で、接尾語的に「たち」が用いられるときには、「だち」と濁音化しないと思われるが、おおよそ一般的現象ではない「だち」から「どち」が生まれるのであろうか。佐藤氏の論に従い「どち」が「友だち」の「だち」から変化したと仮にする。『類聚名義抄』で「友」を「トモ」と「トモダチ」二つの訓みが宛ててあり、「友だち」という語は上代には成立していたであろうことと、『萬葉集』で、すでに十五例「どち」が見られることとを合わせて考えると、「友どち」という語がもっと早くから見られるはずである。

「友どち」は古辞書類では『合類節用集』に一例見られる。「朋友」に「トモダチ」とならんで「トモダチ」と、よみが振られる。資料の中では『大蔵虎明本狂言集』に二例（歌謡と頭書、各一）見られる。それ以前には「友どち」の用例は見当たらない。『日本国語大辞典』にも、それ以前の用例は挙げられていない。これら後代の「友どち」は、上代に見られる「どち」が伝承されてきたものであるが、「友どち」の熟合は、「友だち」の成立とは直接の関係はない。したがって、中世の文章語に見られる「友どち」は、上代に見られる「どち」から伝承されてきた「どち」を複合語に使ったものである。

では、『萬葉集』などで用いられる「どち」は如何なるものか。「どち」は語頭濁音であり、「たち」とは別語で、「とち」が長い年月で変化した状況ではなかろうか。佐藤氏の説は重視すべきものであるが、なお考えてみたい<sup>10)</sup>。

#### 4

「子ども」は複数から汎称・複数の時期、そして、汎称・単数へと変遷する<sup>11)</sup>。「友だち」は、「子ども」と同様に、「友」（「子ども」の場合は「子」と複数を表す接尾語「たち」（「子ども」の場合は「ども」）によってできていることから、「子ども」と同様に変遷すると予想される。

「子」には「おや（祖・親）」という対概念が存在したが、「友」には対概念はない。そのため「友」はその意味領域を固定しがたい。「子ども」は「複数故の共通性、一般性を帯びて、若年齢の人々を指すようになってゆき、この領域を侵すようになってゆく」<sup>12)</sup>と同様に考えると、「友だち」が「友」の領域を侵すことは「子ども」が「こ」の領域を侵すことより容易である。「友」が「友」でなければならない必要性は少ないと思われる。「友だち」の方が範囲を示すことができ、そうして「友だち」で事足りていくのではなかろうか。

現代「子ども」の複数形は「子どもたち」である。そうすると「友だち」の複数形はどうであろうか。「友だちたち」では「子ども」と異なり、「たち」が繰り返されることによって、どこか

違和感が感じられる。

「A君は僕の友だちだ」「A君もB君もC君もみんな僕の友だちだ」A君一人に対してでも、A君、B君、C君三人に対してでも「友だち」は用いることができる。それは、この場合の「友だち」が汎称であるからである。それでは、「A君のために友だちが大勢集まった」となったときでは、「友だち」は汎称であるが、後に「大勢」という語があるため、「友だち」の構成人数は複数であると分かる。

では、「A君の友だちは陽気だ」となるとどうか。こうなると「友だち」は汎称でもあるのだが、個人を指しているとも思われ、単数、複数の判断は不可能となる。では、これを「子ども」に入れ替えるとどうか。「A君の子どもは陽気だ」。これならば、汎称ともとれるが、単数であると判断できる。「子ども」の場合は次のようにすると複数であると分かる。「A君の子どもたちは陽気だ」。これを「友だち」に入れ替えると、「A君の友だちたちは陽気だ」となり、違和感がある。「友だちら」としてもおさまりが悪く思われる。「友だち」の場合は、そのものに複数を表す接尾語を付けるのではなく、文の中に「たくさん」「大勢」「○人」など、複数と分かるものを入れることによって、複数を表すのではなからうか。

以上「子ども」と比較して考えると「友だち」は「子ども」のように完全な単数の意味に変化していき、まだ、複数の意味が消えていない、複数の意味を持ち合わせているのではなからうか。

#### 註および参考文献

- 1) 阪本一郎 1984年 『新教育基本語彙』 学芸図書 P176、177
- 2) 山内洋一郎 1989年 「〈子ども〉の語史」『国語語彙史の研究 十』 和泉書院
- 3) 坂詰力治 1983年 「ともだち(友達)」『講座日本語の語彙 11 語誌Ⅲ』 明治書院 P85
- 4) 森昇一 1964年 「接尾語〈タチ・ドモ・ラ〉」『国語研究』16 P17
- 5) 6)、2)と同じ。P480
- 7) 3)と同じ。P86
- 8) Cōyū カウユウ (好友) Yoi tomodatchi. (好い友だち) よい連れ、または、よい友達、文書語。Tomo. トモ (友・伴) 友だち、または、連れだって行く人々。
- 9) 佐藤喜代治 1979年 『日本の漢語—その源流と変遷』 角川書店 P331
- 10) 棚橋尚美氏「〈ドチ・ドシ〉から〈ドウシ〉へ」(『岐阜大学国語国文学』15 1982年 P127)では、「和語のドシ(同士)と、漢語本来の意をもった「同志」とが音の上では同じドウシとなり、現在に至ったのであろう」とする。そのドシはドチの変化した形としているが、ドチそのものの成立など、それ以上の説明はなされていない。
- 11) 2)と同じ。
- 12) 2)と同じ。

『漢語大詞典』1993年 主編 羅竹風 漢語大詞典出版社

『佩文韻府』1983年 清・張玉書等編 上海書店

- 【簡明漢語逆序詞典】1986年 陳晨 賀国偉 徐玉明編 知識出版社
- 【弘治二年本節用集】『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引】1973年 中田祝夫 勉誠社
- 【運歩色葉集】元龜二年京大本 1969年 臨川書店
- 【惠空編 節用集大全 研究並びに索引】1975年 中田祝夫 勉誠社
- 【類聚名義抄】1981年 正宗敦夫 風間書房
- 【合類節用集 研究並びに索引】1984年 中田祝夫・小林祥次郎 勉誠社
- 【邦訳日葡辞書】1980年 土井忠生・森田武・長南実 岩波書店
- 【時代別国語大辞典上代編】1967年 上代語辞典編修委員会 三省堂
- 【毛詩抄・蒙求抄】抄物資料集成 第六卷 1971年 岡見正雄・大塚光信 清文堂
- 【日本書紀 前篇】第一卷上 新訂増補国史大系 1966年 吉川弘文堂
- 【藻塩草】本文篇 1979年 大阪俳文学研究会 和泉書院
- 【萬葉集】『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『今昔物語集』日本古典文学大系